

子どもの個性を活かす教育

白井常



一、個性の喪失をもたらす現代社会の問題

自由と孤独

エリッヒ・フロムはその著「自由からの逃走」のなかで、現代人にあたえられた個人の自由について、つぎの点を指摘している。社会のきずなにがんじがらめに拘束されて、個人の自由

など夢想だにできなかつた中世の暗黒時代から、個人の解放を目指す幾多の闘争を経て、先人の血みどろな努力の結晶として克ちとられた自由なのである。

自由は個人の自立と理性とをもたらしたが、同時に人間を孤独の境地に導いた。現代人はこの孤独のために、不安と無力さ

とになやみはじめ、せっかくかちえた自由から逃れようとさえしている。その逃避機制の一つとしてあげられているのが、機械的同調性である。もはや人びとは自分自身であることをやめ、動物の保護色のように、周囲の人びとと全く機械的に同調し、周囲と自分との間のずれをなくすことによって、一人ぼっちの不安から逃れようとする。周囲の集団のなかに、自己を喪失して埋没してしまうのである。

マス・コミの影響

われわれの日常生活をふりかえってみると、こうした機械的同調性がもたらした個性の乏しさを痛感する。情報機関の進歩とともに、人びとは無意識のうちに多数者の意見に迎合し、自分の考え方を、感じたを簡単に放棄してしまう。やがては、自分自身の考えをもどうともせず、空白な頭と心に、他人の意

見を自動的に刻みこもうとする。こうした無批判な、盲目的な大衆は、独裁的な指導者に牛耳られる危険性を多分にはらんでいるのである。

規格品の氾濫

他方、産業の進歩とともに、多量生産の規格品が市場に氾濫している。消費者側の批判と抵抗がなかつたら、格安な規格品が氾濫するのは当然なことである。日本人ほど画一性に無抵抗な国民は少ないともいわれている。流行に眼をとめてみるとよい。色にせよ、形にせよ、何か一つが流行しはじめると、またたく間に猫も杓子もといいたいほど、一齊にこれをとりいれる。個性が問われない証拠ともみられるのである。

育児の画一性

個性の喪失が教育上もつともなげかわしいかたちで示されているのが、育児の画一性であろう。週刊誌を手にとるような気軽さで育児書が読まれ、虎の巻のような簡便さでその内容が児に応用される。そこには、育児にたずさわる母親の個性が、まったく活かされていないのである。

育児書を手頃な長さで書くためには、子どもの発達を平均的に扱うよりほかはないだろう。参考書として利用されるときに

は、育児に役立つこの種の書物も、一人ひとりの子どもの成長の対照表のように用いられると、かえって有害になる。年令平均の身長や体重はいうにおよばず、知恵つきの度合まで、ひたすらに平均児を目標として、足りないと云つては歎き、過ぎるといつては憂慮する。そして、つねに周囲の子どもとの比較において、育児がおし進められていく。これでは、子どもの個性はその芽生えからつみとられてしまうようなものである。

個性喪失の病には治療が必要なことはいうまでもないが、それよりもいつそう重要なのは予防の問題ではないだろうか。子どもの発達の初期から、もつと個性をのばそ удする工夫が、教育の上で真剣に試みられなければならないことを痛感する。

二、知的発達における個性の活かしかた

模倣と創造

模倣は知的学習の重要な基礎である。ピアジェが指摘しているように、現実を自己に順応させようとする同化の働きに対し、自己を現実に順応させようとする調節の働きが模倣によつておこなわれるのである。この調節の作用がなければ、同化の働きはますます内閉的となり、客觀性を欠く。同化と調節の働

きが均衡を保つときに、現実に対する知的適応を示すことができる。この意味で、模倣は知的発達に欠くことのできない重要な役割をはたしている。

動作や音声に対する随意的な模倣は、生後四ヶ月ごろからはじまり、成長とともに複雑な模倣ができるようになる。とくに、話すことばの発達は模倣に負うところが大きい。また、「ごっこ遊び」でおとなの大まかさを好んでするのは周知の事実である。

模倣はこのように、知的発達には不可欠のものであり、子ども自身もしきりに実行する。しかし、手放しで幼児の模倣を促進すると、独創性を失う危険がある。模倣の好きな子どもは、他方において、おとなには及びもつかない独特なものを見かた、感じたをする。

一例をあげてみよう。幼稚園の描画の時間に、みんなが自動車の絵を描いていた。そのなかに一人、車りょうが上向きになつている逆位の自動車を描いて、周囲の子どもたちには「変だ」といって笑われ、先生には「それはおかしい」と批評された。きいてみると、「飛行機の上から見たら、きっとこんなに見えるだろうと思ったんだ」というのである。規格にはまらないこの子どもの絵は、実は「変だ」と笑い去つてしまえない、高度に知的な表現だったのである。

子どもには、このようにとつびにさえみえる独創的な行動がある。常識の枠でその芽をつみとってしまうことのないよう心しなければならない。ピアジェの主張する同化と調節のバランスは、独創性と模倣という面におきかえてみても、その意味の重要性をおもわずにいられない。

まわり道の重要性

子どもの独創性を大事に育てようとすれば、まわり道を歩ませるゆとりをもたなければならぬ。このゆとりは、学ぶ子どもの側にも、これを導くおとの側にも必要である。課題に対してつねにレディー・メイドの解答が用意され、試行錯誤に費やす迂回の無駄を省いてやろうという親切心は、かえって子どもの主体的な学習態度を損う。右往左往しながらも、自分で目標にたどりつけた子どもは、工夫という貴重な知的活動を習得したことになる。

知識を即答式に求められることがあまりにも多い。「葉の色は？」と聞かれたら、「緑」と答えるという具合に、迷いのない一直線の解答である。しかし、子どもの具体的な観察からは、このような簡単な結論はでこない。葉の緑が赤になり、やがて黄になる紅葉もあれば、緑が黄になるだけの銀杏の葉もある。緑が褐色に変るのあれば、そのまま変わらぬものもある。

る。はじめから、赤や黄の葉もなかにはあるのだ。こうした実際の観察や思考を素通りした常識による形式的な結論を早急に身につけることの無意味さを、幼児教育にたずさわる者はもつと考えてみる必要がありはしないか。

興味の自己展開

好奇心や興味は、知的活動を促進するのに効果的である。したがって、子どもの興味が少しでもながく続くことを誰しも望む。だが、幼児では注意の持続時間が非常に短いのだから、興味の持続をあまりながく期待することはできない。むしろこの時期には、いかにして飽きずに、つぎの新しい興味へと自分で展開し続けていくかに、教育者の関心が向けられなければならぬ。

興味の自己展開には、玩具のとる役割が大きい。玩具箱をひっくりかえして、多くの玩具にとりまかれ、あれこれに目移りするような状態では、注意が散漫になつて、興味の展開に適切な環境だとはいいがたい。玩具を一種類ずつ小箱に入れて、棚に並べ、子どもが自由にそれるようにしておくと、遊びの環境は見違えるほど整頓される。一箱とつてては遊び、飽きたらそれを片づけて、他の箱ととりかえるように訓練すれば、子どもは落ちついで興味の展開をはかることができるだろう。飽き

たまほんやりしている場合には、つぎを選ぶように、おとなから刺激をあたえてやるとよい。

玩具の選択にも心を配らなければならない。はじめはそれが子どもの興味をそそるようなものをあたえ、成長に応じて、しだいに構成的な玩具をふやしていく。同じ玩具でも、子どもが手を加えることによって、それからの刺激を自分で変化していくことを学びると、同じ玩具でながく遊べるようになる。とくに、想像力の発達にともなつて、この傾向がますます強くなる。独創性の発達は、このような面でも、おとの工夫しだいで促進される機会がいくらでもあたえられるのである。

三、社会化過程における個性の活かしかた

協同遊びと一人遊び

乳児期は一人遊びをしたのしむ時期である。生理的な要求がみだされていると、自分の身体の部分に刺激されて、いわゆる「機能遊び」にうち興じている赤ん坊をよくみかける。遊び道具も遊び相手もいらない一人遊びなのである。乳児期を過ぎるころから、別々に遊んでいても、他の子どもが傍らにいることをよろこぶ「並行遊び」の傾向がみえはじめる。やがて三才ともなると、一般には遊び友だちをつよく求める。三年保育が実

施されているのは、こうした子どもの要求に答えるためでもある。ところが、いざ幼稚園にはいってみると、そう簡単には友だちをつくれない。心ならずも集団の外側で、一人遊びをするしかない子どももでてくるのである。こういう子どもも、やがては友だちといっしょに「協同遊び」ができるよう、社会性を身につけていかなければならない。

集団の中に嬉々として遊んでいるわが子を見いだした母親のよろこびは、たしかに意味があるものである。しかし、社会性の教育は、子どもを集団の中に送りこむことだけではない。「協同遊び」ができるようになっても、一人で遊べる子どもでなくてはならない。社会性の発達に心を配るおとなは、この点を看過しがちである。一人でしか遊べない子どもに寄せる心遣いを、集団のなかでしか遊べない子どもに対しても、同じように向かっているだろうか。子どもの個性を伸ばすと努力するものは、社会化の過程で、なお一人遊びのもつ意味を十分にわきまえている必要があるのでないだろうか。

集団のなかでの独自の行動

幼稚園では、同年齢の児童が集団行動の訓練を受ける点で、家庭ではどることのできない大切な役割がはたされているのである。この役割は、一般にどの幼稚園でも、かなりよく遂行さ

れている。しかし、集団のなかで、各自が自由に独自な行動をとるようにしむけるプログラムを組んでいるところは、案外少ないので、自由遊びにそれを求めるとき、一人遊びのできない子どもでは、その機会があたえられない。ある幼稚園では、前項で述べた一人遊びの方法を、一定の時間、組全体に課している。数人ずつ一つの机を囲んでいるのだが、この時間には、各自がそれぞれのペースで、周囲の児童にわざわざされることなく、自分の興味を開拓している。まさに「わが道をゆく」典型的な光景がみられるのである。

集団生活の基本的な訓練をする幼稚園では、小集団で、あるいは組全体で、一齊に協力して集団行動をとる面、集団のなかで各自が別々に個人的な行動をする面、さらに、自由な遊びのなかで、そのいずれかが子ども自身の選択によって行なわれる面、この三つの面が毎日の保育のプログラムのなかに計画的に組み入れられることが望ましい。

個性教育は、集団のなかに個が眞に活かされねばならないといふ現代人に課せられた自由の根本問題を背景に控えながら、子どもの発達の初期から、成長に即して、一步一歩おし進められていかねばならない困難な、しかもこの上なく大切な問題である。